

1-1 シンセサイザーとは？

シンセサイザーとは？

シンセサイザー(英語:synthesizer)は主に電子工学的手法により楽音等を合成する楽器「ミュージック・シンセサイザー」の総称。

-Wikipediaより-

シンセサイザーの語源は、「合成(Synthesize)」という言葉。

簡単にいうと「音を電氣的な手法で合成して作り出す楽器」のことで、このうち「電氣的な手法で合成して」という部分がミソ。同じく電気を使ったエレキギターやエレピとの決定的な違いはここにある。

電気楽器と電子楽器

- 電気楽器（エレキギターやエレピなど）
 - 楽器の発音機構（弦など）が生み出す振動を電気信号として取り出し、何らかの処理をして音声を出力する仕組みを持った楽器。発音原理はアコースティックである点に注意。
- 電子楽器（シンセサイザー）
 - 電気回路を利用して音そのものを作り出す楽器。電気の持つ「波」の性質を利用して音を生成・加工し発音する。

両者は明確に異なるものなので混同しないようにしよう！

シンセサイザーの種類

- 純粹なシンセサイザー
 - ✓ アナログシンセサイザー
 - ✓ FMシンセサイザー
 - ✓ デジタルシンセサイザー
- ワークステーション
- 音源モジュール
- ソフトウェアシンセサイザー(ソフトシンセ)

純粹なシンセサイザー: アナログシンセサイザー



オシレータと呼ばれる発振器が生み出した単純な波形を元に、サウンドを合成していくシンセサイザー。すべてのシンセの基本とも言える存在で、シンセを学ぶ上でアナログシンセのマスターは必要不可欠。代表的なアナログシンセとして、MOOGやPROPHETなどがある。

純粹なシンセサイザー:FMシンセサイザー



FM合成(Frequency Modulationの略)を使用して、複雑な倍音成分を生成することができるシンセサイザー。アナログシンセの操作方法を応用して使用するので、アナログシンセに関する知識を身につければ仕組み自体は簡単に理解できる。代表的なFMシンセにはYAMAHAのDX7がある。

純粹なシンセサイザー: デジタルシンセサイザー



人工的に作り出した複雑な波形やサンプリング音源等を使用し、よりアグレッシブな音作りを可能にしたシンセサイザー。その種類は多岐にわたり、広義ではFMシンセもこれに含まれることもある。代表的なデジタルシンセは、KORGのWAVESTATIONなど。

ワークステーション



幅広い用途で使えるよう設計された多機能シンセサイザー。以下のような特徴を持つ。

- 音源部分はデジタルシンセ
- リアルタイム演奏しやすい質の高い鍵盤
- パラメータコントロールに便利な液晶画面 & ツマミ & フェーダー
- シーケンサーやサンプリング機能など

代表的なものは、YAMAHAのMONTAGEシリーズや、ROLANDのFANTOMシリーズ、KORGのKRONOSシリーズ。

音源モジュール



シンセサイザーやワークステーションから音源部分だけを取り出し、DTMでの使い勝手を向上させた商品。2000年代初頭まではDTM用音源として主流だったが、ソフトシンセの台頭によって徐々にその数は減りつつある。昨今では以下のいずれかが主流。

- ソフトシンセでは再現が難しい純粋なアナログシンセ
- デジタルシンセのラックマウントバージョン

前者は、MOOGのMother-32、後者はROLANDのINTEGRA7などが有名。

ソフトウェアシンセサイザー(ソフトシンセ)



シンセサイザーをソフトウェア化したもの。主に2つのカテゴリがある。

- 往年の名機をソフトウェアエミュレートしたもの
- ソフトウェアならではの複雑な音作りが可能な多機能なもの

前者は、ARTURIAのV Collectionに代表されるようなエミュレート系、後者はOmnisphereやSerumといった高機能ソフトシンセが有名。

DTMに適したシンセはどれ？

- 第1位: ソフトシンセ
- 第2位: 音源モジュール
- 第3位: 純粋なシンセサイザー
- 第4位: ワークステーション

やはり、コンピュータ上で動作し保存もリコールも簡単なソフトシンセが最も使い勝手が良い。ハードウェアを購入するなら音源モジュールが便利。さらに、実機ならではの質感や、ステージでの演奏などの機能を求めるならば、純粋なシンセサイザーやワークステーションに手を出すのもアリだが、非常に高価かつ場所も取るので無理して導入する必要はない。